

3-4. 南房総市（千葉県南房総市）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

南房総市は人口は約4万2000人、面積は230.22km²、房総半島の南端に位置している。北側には県下最高峰の愛宕山（408m）をはじめ、富山（349m）等300m以上の山が連なり、西側には東京湾、東側及び南側には太平洋と三方を海に囲まれ、その海岸線は、南房総国定公園に指定されている。平成18年3月、富浦町、富山町、三芳村、白浜町、千倉町、丸山町及び和田町の7町村が合併し、新しく「南房総市」となった。平成9年に開通した東京湾アクアライン、平成16年に開通した一般国道127号富津館山道路に続き、東関東自動車道館山線が平成19年7月に全線開通となり、東京からのアクセスが約90分と東京圏から南房総がより身近になった。

気候は、沖合を流れる暖流の影響により冬は暖かく夏は涼しい海洋性の温暖な気候で、一部無霜地域を有し、特に1～3月に咲く色とりどりの露地のお花畑は人気のある早春の観光資源となっている。四季折々に咲き乱れる花々などの豊かな自然資源と、古代から近代に至る遺跡や社寺などの歴史的資源を有する地域である。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

千葉県南房総市は、交流人口の増加に力をいれているが、高速道路の開通による日帰り客の割合の増加や震災の影響もあり、宿泊事業を中心に低迷している。観光の新たな展開として、自然環境資源を活用したエコツーリズムに取り組みたいと考えている。

市内には、エコツアー・ガイド等を行なっている活動団体が複数あるものの、ガイドやプログラムの質のばらつき、不十分な受け入れ態勢、連携不足やPR不足等の課題があり、エコツーリズムが地域としての一貫した取り組みになっていない。またエコツアーの商品は、学習旅行等の体験学習の一環として団体向けに提供されるものが主で、一般の個人のお客様への対応が不十分である。

一方で、南房総市は平成26年3月、千葉県初の森林セラピー基地と認定される予定となっており、これを機に、エコツーリズムに特に力をいれて取り組んでいきたいと考えている。今後新たな観光商品としてのエコツアーを持続可能な形で実施していくために、さらにエコツーリズム推進の核となる組織（「南房総体験観光プラットフォーム（仮）」）の立上げのため、運営組織・人材の育成、関係する主体間の役割分担と連携、エコツアーを業として成り立たせるための仕組みの構築等、実際の経験を基にアドバイスを頂きたいと考え、今回の申請に至った。



(2) アドバイザー派遣実施の概要

日 時	平成 26 年 2 月 2 日（日）～平成 26 年 2 月 3 日（月） 平成 26 年 2 月 15 日（土）～平成 26 年 2 月 16 日（日）
場 所	<p>■1 回目 視察：大房岬自然公園、富山水仙遊歩道、平群の古民家“ろくすけ” セミナー会場：とみうら元気倶楽部 交流室 打合せ：道の駅とみうら枇杷倶楽部</p> <p>■2 回目 シンポジウム会場：南房総市役所 大会議室 視察：(千葉県南房総市、館山市) 崖の観音、フラワーライン、根本海岸、白浜野島埼灯台周辺</p>
アドバイザー	NPO 法人信越トレイルクラブ 事務局長、一般社団法人信州いいやま観光局 事務局次長 木村 宏 氏
参加者	<p>■1 回目 南房総市観光協会、南房総市内道の駅、南房総市エコツーリズム推進協議会、 NPO 法人千葉自然学校 大房岬少年自然の家、南房総市商工観光部観光プロモーション課など 約 30 名</p> <p>■2 回目 南房総市エコツーリズム推進協議会、南房総市地域づくり協議会、観光協会加盟宿泊施設、 道の駅関係者、近隣市町村職員（館山市、鋸南町）、 その他エコツーリズムに興味のある一般の市民、南房総市（副市長、観光プロモーション課） 約 50 名</p>
スケジュール・方法	<p>■1 回目 【1 日目】 ・視察 大房岬自然公園、富山など、森林セラピーロード候補地 【2 日目】 ・セミナー及び意見交換会 「エコツアー運営するための組織と人材育成について～信州いいやまの事例から～」 ・次回の打合せ</p> <p>■2 回目 【1 日目】 ・打合せ ・シンポジウム 【2 日目】 ・視察 南房総ロングトレイル等 ・意見交換 ロングトレイル事業運営について</p>

(3) アドバイスの内容

●第一回目のアドバイスの内容

- ・ 主なアドバイスは、セミナーを通じて行なわれた。発表のなかで、初日の視察、及び以前南房総に視察にいらした際の当地域への感想を随時織り込んで理解しやすく発表頂いた。「エコツアー運営するための組織と人材育成について～信州いいやまの事例から～」をテーマにたくさんのスライドを用いてご講演頂いた。内

容は、飯山の概要について、森林セラピーの取り組みについて、信越トレイルについて、(社)信州いいやま観光局という組織の仕組みについて、着型旅行商品の作り方についてなど盛りだくさんであった。

- ・ 長野県飯山市と当千葉県南房総市は、南房総がかつて海水浴で栄え数多くの民宿があった歴史と、飯山がスキーでかつて栄えたという点で共通性があるのでは、と触れられた。飯山では、かつては5箇所あったスキー場が3箇所になるほどのお客様の減少をうけて、スキー一色の観光地からの脱却に向けて始まった取り組みが紹介された。飯山では、昭和50年ごろからグリーンツーリズムの取り組みが始まり、最初は学習旅行等の団体を対象に行なわれてきたが、一般の人達も楽しめるよう、氏が所長を勤めていた「なべくら高原の家」において様々な地域資源を観光商品化、メニュー化を行い、人材育成も行なってきたと紹介された。
- ・ 飯山では、ブナの森を守ったり、農地を再生したり、といった活動にボランティアでやってくるお客さんがかなりおり、これもエコツーリズムで、こういう観光のあり方もあるとの紹介があった。前日に視察した南房総の水仙遊歩道では、白い花が一面に群生する水仙の小道はとても素敵だったが、周りの林が荒れていたり、ゴミが落ちていたり、という事が気になったとのこと。こういった問題の解決にボランティア・エコツーリズムの力を借りる事ができるのではないかと、という提案を頂いた。
- ・ 飯山の景観作りの取り組みは非常に興味深かった。山並みをそぐわないように、“日本のふるさと”のキャッチコピーにそぐわないように、というコンセプトで景観づくりを行ってきたとのこと。国に電線の地中化をお願いしたり、施設に商業看板の撤去や低位置化をお願いしたり、また自主的に協力してもらえよう環境作りを10年以上かけて、また市長が強い意志をもって行なってきた。南房総のフラワーラインでは、特に商業看板は気になったとのこと。市の中心を走る国道117号線脇の花壇の植栽にも、市民が係ることで、その後の様子を見に来たり、ゴミがないようにしたり、といったように道をきれいに保つことができるという。飯山ではこういった取り組みの結果得られた景観が、大きな評価を得て、非常に大きな財産となっているとのことであった。
- ・ 森林セラピーの取り組みについては、飯山では最初は市が先導して行い、今は着型旅行商品のひとつとして展開している。病院との提携例や、寝たきりの人を森に連れて行く取組の実験結果について紹介いただいた(お年寄りたちの表情の変化はとても興味深いものであった)。森林セラピー事業には、様々な異なるお客さまの状況に合わせる事ができるスキルの高いガイドをどうやって育成するか、どのようにお客さまを呼び込むかといった課題があり、事業の位置付けを明確にしないと、実のある取組にならない恐れがあるとアドバイス頂いた。
- ・ 長野と新潟の県境16の地域を通るトレッキングルート、信越トレイルの取り組みについては、連携の調査事業を発端に、日本のロングトレイルの第一人者の加藤則芳氏との出会いがあり、始まった取り組みであったこと、参考にしたアメリカのアパラチアントレイルの例や、迷った時に戻るための“憲章”には生物多様性の保全を基調にしたこと、毎年自然環境のモニタリング調査を行っていることをご紹介頂いた。計画から完成まで、8年間かかり、のべ2000人の力を借りて作られたこと、ここでも、多くの地域の人に関わり、環境省のエコツーリズム大賞受賞の際にも評価されたとのことであった。現在は年間3万6千人のお客さんを受け入れており、40人のガイドの登録になっているとのことであった。
- ・ エコツアーを提供する組織については、(社)信州いいやま観光局の事例紹介を頂いた。観光セクターの統合、ワンストップ窓口の構築を目的に、観光協会と、市内の観光施設を運営する振興公社が一緒になった。すべて観光の情報は観光局に集約され、セールスプロモーションも含めて、観光局が観光のものについては一手に引き受けているとのこと。
- ・ また観光局では、講座を開催するなどガイドさんの養成にも力を入れており、みんなでガイドさんを育てていくことが大事、そうでないとうまくいかないと述べられた。森の家がガイドやエコツアーの情報の集約をして、販売を観光局という役割分担であるとのこと。
- ・ 広域観光の取り組みとしては、同じ新幹線の駅を使う地域で協議会「信越自然郷」をつくり、お客様が新幹線を降りたとき利用できる旅行商品を一緒に作っていきましょう、と呼びかけ飯山が主導で実施している例

をご紹介頂いた。

- ・ 参加者からの質問、「観光局の取組みを行ってきたうえでの苦労話は？」という問いには、苦労の連続であったとのこと。行政の役割はインフラを整えることではという意見が議会等でもあがるなか、市長が強い信念をもって行い、やりつづけることで形になってきたことであった。地域の資源を商品にするのは時間がかかるし、体験メニューをつくっても収益があがらないが、意義を説明して理解をしてもらう、ということの連続であり、理解者をどうやって増やしていくかが重要に思うと話された。飯山旅々。という、観光局で販売している着型旅行の商品群についても、賛否両論がある。10人しか受け入れられないプランでも、価値のあるものを地域で作っていくと、観光地の再生につながっていく。
- ・ 飯山での旅行商品の作り方としては、全体で10人ほど商品造成を行う人材がいるとのことであった。飯山観光局のエリア担当者が地域の観光協会や民宿組合や宿の人などを巻き込んで、商品を作っていくとのことであった。地域の人々が旅行商品を作る力をつけることが重要。商品の宣伝は、Webサイト「飯山旅々」がメイン。売り上げは多くはないが徐々に上がってきており、今年、600万円くらいになってきた。商品はリピート率や評価がとて高く、「今まで民宿に泊まったことなかったけれど、民宿のファンになった」という声も聞かれているとのことであった。春からは、宿プランをラインナップする予定との紹介があった。



●第二回目のアドバイスの内容

- ・ 記録的な大雪のため、公共交通が利用できない状況のなか、機転を利かせてレンタカーで駆けつけてくださり、時間通り開催することができた。悪天候により、参加者はやや少なかったが、近隣の市からも多く参加いただくなど、今後の安房地域の行政区を越えた連携の可能性を伺わせるものであった。
- ・ 一回目のセミナーは主要組織要職の方を対象に開催したが、今回のシンポジウムは、は各種組織の一般会員のほか、広く一般市民の方を対象とし、木村氏には一回目の内容を基調にダイジェスト版でと発表をお願いしたが、より一般人向けということで、冒頭に「エコツーリズムとはなんだろう？」という導入部分を設けていただき、また環境省のエコツーリズムモデル地区指定を受けている佐世保の紹介を頂いた。飯山は、観光がないと食べていけない地域だが、南房総はそうではないのかもしれない、またそういった点で、海辺の南房総と佐世保が共通するところが多く今後の参考になるのでは、と、「させばエコツーリズム」ガイドラインを紹介頂いた。
- ・ 飯山の事例紹介の後、発表の最後には、南房総市でのエコツーリズムの可能性を考えると、「検討のポイント」として、地域資源の活用と自然資源の保全と継承、地域資源の掘り起こし、エコツーリズムの展開による地域の活性化、地域連携、地域が関わる仕組み作り、団体間の連携や交流を課題に挙げていただいた。特に、観光に関わる組織・窓口の一元化について、飯山では必要であったが、南房総ではどうですか？と参加者に問いかけて頂いた。
- ・ 質疑応答では、実際にエコツアーの提供を行なっている方や（ガイド）、里山保全を行なっている方から、信越トレイルについて、ルート設定や地権者および地元集落との関係などについて、質問が多くあった。

- ・ またシンポジウム後半のまとめに当たっては、雪により会場に来る事のできなかったコーディネーターに代わり木村氏に急遽コーディネーターも引き受けていただいた。地元の2活動団体(NPO 法人千葉自然学校、NPO 法人富浦エコミューゼ研究会)からの事例発表のあとコメントを頂き、また市内で様々な活動している団体がある中、特に行政が、団体間のそういった意見・情報交換の場を積極的に設けてもよいのではないかとアドバイス頂いた。
- ・ 翌日の視察では、雪の影響もあり車中からの見学が主であったが、信越トレイルの運営の細かなところや、ツアーづくりの背景等教えていただくことができた。また互いに道の駅を運営しているので、道の駅の産品交流ができないかという話も生まれた。



(4) アドバイザー派遣実施の効果

●参加者や関係者に与えた効果

組織の話については特に、観光協会のメンバーに響いたようであった。それは、観光協会がこれまで旧町村の支部単位での動きが主であったが、新年度から合併を予定しており、今後の組織のあり方が問われているからであるが、いいやま観光局の姿が、今後の目指すべき組織の在り方の一つとして、具体的なイメージで幹部の間で共有できたのではないかと感じる。理論としてではなく、実践者による事例の紹介により、説得力を持って伝わったようだ。宿泊施設が地域づくりに積極的に関わっていく手法も、今後の活動の参考になったとのことであった。

今年から本格的にロングトレイルの取組み(ツアー)を始めたNPO 法人千葉自然学校にとっては、このタイミングで直接ロングトレイル事業について先進地から具体的にお話しを聞いた事はありがたかった、との感想があった。今後の運営に大いに参考にしたいとのことであった。

第二回目のシンポジウムでは、近隣の市、特に安房地域の中心地である館山市の団体からも多くの参加を得る事ができ、行政レベルではなかなか難しい連携を、民レベルで推進していこうという話題で盛り上がったと聞いた。

●今後の期待される効果

観光の窓口の一本化について、それが可能となったらどういった新しいことができるのか、何かしらのイメージが共有できたのではないかと感じる。すぐに新たな中間組織の立ち上げにつながることを期待するのは難しいが、そういったセクターがエコツーリズムを推進していく上で必要そうだという意識の共有が進んだことが期待される。

●今後の取り組み

森林セラピー基地認定に合わせて実施するガイド養成・商品造成事業において、ガイド養成に取り組む予定であるが、単年度のみでなく、持続的な活動に繋げていけるようなシステムを検討したい。また、観光商品を企画開発・販売していけるような人材を育成する事業を計画している。これらの事業の中で、地域の関係者をうまく巻き込ん

でいけるよう、今後の有機的な連携に繋がるような働きかけを行っていきたいと考えている。加えて、佐世保のガイドラインや、信越トレイルの憲章のようなものを、検討してみたいと考えている。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

- ・ 木村氏は、エコツーリズムという観光の性質について、始終指摘されていらっしやった。それは、エコツーリズムというものは地域の人々の生活、自然が育んできた文化をしっかりと知って次の世代に伝えていこうというツーリズムであり、それらを楽しみながら、地域のものをしっかりと旅行商品にしていく必要があり、地域の人達の思いがないとなかなか続かないということ。エコツーリズムに取り組んでいくには、それなりの覚悟を持たなければならない、と言われているように感じた。
- ・ 体験メニューは、準備などが大変にも関わらず、きちんとした対価が支払われないのが辛く、また、クラブト・ものづくり系はあまりリピートされない。しかし、感動するものや、自然や文化に触れるといったツアーについてはリピート性が期待でき、メニューを提供する際、そのツアーの意義をどうやってうまく伝えていくか、どれくらいの地域の自慢ができるのかが大事で、思い入れをもってメニューを作り提供できるか、これができるかどうかで、エコツーリズムがうまくいくかが分かるとのことであった。思いをもったガイドやメニューというのは、難しそうであるが、そうある必要性は理解できるし、忘れてはならないと感じた。
- ・ また、紹介頂いた飯山の様々な事例から、地域の色々な、多くの人を巻き込んでいくこと、効果的な連携の形を考えていくことが、エコツーリズムを持続可能な取組みに育てるための秘訣と感じた。
- ・ 信越トレイルでは、開通するまでに8年を費やしていること、すべての150ものすべての地区・集落で説明会を開いて理解を得る努力を行ってきた事、理念や憲章がしっかりと掲げられている点などに感銘をうけた。また、登録宿には、年間3回のボランティア参加を義務付けるなど、宿泊施設にお客さんを泊まらせるだけではなく、活動に参加させ、現場を知ってもらうことが、お客さんとの話題の共通話題をもち、宿泊の満足度を上げるという内容に、是非同じことが南房総でもできればよいと感じた。宿には、自ら宿泊事業者も商品作り、商品育てに関わってくことで、息が吹き込まれた商品になるというのは説得力があった。
- ・ 地域と、現場と真摯に向き合って地道に活動を積み上げていくことが必要だと強く感じさせられた。

●その他感想

- ・ 地域の自然文化を広く伝える事が観光であり、また後世にきちんと残すための手段である。地域の自然文化が豊かであることが、地域住民の生活の質を上げ、それが他所からのお客様にとって魅力的になる。そういった好循環がエコツーリズムの本質であり、やはり地域の自然文化をいかに伝えていくか、という本質を常に見失わず、商品化に取り組んでいかなければならないと、再認識させられた。
- ・ 今回発表いただいた先進的な事例は、一朝一夕ではなく木村氏が飯山に移住されて以来の取組みが積み上げてきた実績で、(社)信州いいやま観光局となって一元的な取組みとなって現れてきたものであり、組織を一本化したからといってすぐに同じような成果があがるものではないであろう。南房総は観光協会も市内に8つある道の駅を運営する複数の第三セクターも、やっと一部の合併が進んだ状況で、観光の窓口をすぐに一本化することは現実的に不可能である状況だが、しかし、この南房総にも、これまで理念をもって活動を続けてこられた人・団体が存在するわけで、互いの得意分野を生かし不得意分野を補う関係で、エコツーリズムを体現する南房総ならではの組織・システムの形を探れないものかと考えた。
- ・ シンポジウムに参加された方等から、皆で飯山に視察に行きたいので是非企画してほしい、といった声も聞かれた。木村氏とは、道の駅間での産品交流や、今後の物販などを通じての交流の可能性も話題となった。今後も具体的に学ばせて頂きたいし、また様々な面で交流を続けさせて頂きたいと考えております。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

NPO 法人信越トレイルクラブ 事務局長、

一般社団法人信州いいやま観光局 事務局次長 木村 宏 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

かつて、海水浴や周遊観光で賑わいを見せ、近年では花や道の駅を核にした物産販売などの付加価値をつけた観光地として根強い人気のある南房総エリア。

7町村が合併してできた南房総市に隣接し、館山市、鴨川市、鋸南町等観光地は多い。アクアラインの開通以来、東京、川崎、横浜といった都心からのアクセスの利便も向上し直通バスの運行も来場者増につながる要因となっています。しかし、海水浴客の減少やアクセスの利便向上により、宿泊者が減少し、従来型の観光地としての受入も限界のなかで、地域の自然資源を生かしたエコツーリズムの推進を模索する動きが出てきています。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

温暖で都心からも近く、海と山の資源が豊富なエリアであり、特に半島中央部の丘陵地帯には手つかずの森林やそこに暮らす人々の生活風景が残っています。まさに里山の風景です。また、荒れてはいるものの、温暖な地ゆえの動植物が生息する森林資源も残っています。これらを活用し、また長年培ってきた海洋資源や花卉栽培の盛んなエリアの特性を生かした新たな取り組みの可能性を感じました。

●アドバイス（講義等）の概要

セミナー、シンポジウムを通じ、まずは観光関係者へ意識喚起をするために、飯山市がスキー観光依存から脱却してきた経緯と、新たな取り組みとしてグリーンツーリズムやエコ、ヘルスといったニューツーリズム分野への展開をしてきた状況を示し、地域資源の商品化、その発信、集客の方法や、仕組み作りさらに、地域の自然資源をはじめとした地域にとって大事な資源を守るためにボランティアの力を借りての活動の事例を紹介し、その輪を広げることで事業展開ができたことなどを話しました。

また、市民参加で観光資源を作り出す、景観の取り組みなども話し、地域の理解と市民参加で作上げるエコツーリズムの例を示しました。

さらに、観光窓口の一元化と着地型商品の造成の方法、その中のエコツーリズム商品について紹介しました。

また、市民に向けたシンポジウムでは、これらの他に、エコツーリズムの定義や地域にとっての必要性を検討する事例として、佐世保地区のエコツーリズム推進の状況を説明し、旧来型の観光から脱却するための地域内における意識改革や、観光関係者以外の住民の意識醸成が必要なことなどをお話ししました。

地域内には、地域資源を活用し海洋資源の観察会を永年続けているグループや、里山の大事さを訴えネットワークを作り活動しているグループ、さらには自然学校などの活動団体も多く熱心に聴講いただきました。

●全体構想への取組状況・意向について

地域が南房総市の呼びかけでエコツーリズムの機運をあげ、取り組みを盛り上げること、さらには既存の活動団体などがネットワークを組んで事業推進体制を作り、小さな運動からエコロジーな生活や、お客様を迎える姿勢を考えていくことが必要ではないでしょうか。全体構想を作る以前に地域としてこの活動に取り組んでいくべきかどうか話す機会を持ち、さらにはエコツーリズムのあり方を検討する段階ではないでしょうか。

全盛期ほどではないにせよ、漁業や花卉・果樹栽培を中心とした産業が成り立ち、周辺都市のベットタウン化も

すすむ地域にとって、意識の喚起や醸成は少し時間をかけて取り組む必要があるのではないのでしょうか。

情報発信基地としての道の駅や、観光協会、さらには自然体験施設の運営や教育旅行などを受け入れる NPO も存在し、これらが行政も含め有機的なつながりを持ってエコツーリズムの推進体制を構築することも可能ではないかと感じました。

しかし、現状では全体構想を作る前に、まず意識喚起こそ地域にとっての課題ではないのでしょうか。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

今回、南房総市の取り組みとして本事業が実施されました。しかし、南房総エリアは本市だけではなく隣接した、館山市、鴨川市、鋸南町など、来訪者にとってはほぼ一体のエリアと考えられます。房総半島の南の地域をどこから区分するのは地域の皆様で検討していただくとして、一体的な取り組みになることを期待いたします。

来訪者は、南房総市と隣接市町村界をあまり意識することなく温暖な気候の花のある風景を楽しみに、海の幸を楽しみにやってこられるのだと思います。さらに環境に配慮した生活に住民が取り組み、来訪者への模範となり、新たな旅の空間演出を進めていただきたいと思います。

事業発案者たる南房総市のプロモーション課の皆様には、地域住民へのエコツーリズムを知っていただけるためのインフォメーションや、既存の団体の活動支援や情報共有をするための仕組み作り、さらに活動団体と共に、エコ活動（ツーリズム）への参加の積極的な呼びかけを期待しております。また、既存の団体の職員などの交流会などを持ち、情報交換や理念の共有、さらには高品質なインタープリテーションができる人材の育成も必要です。来訪者の多い観光地にあって、まずは地域内のエコツーリズムを展開していただきたいと思います。